『神のことば キリスト』ヨハネ1:1-5

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
1:2 この言は初めに神と共にあった。
1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。
1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

●主題
Ⅰ．起源ははじめから
Ⅱ．すべての造り主
Ⅲ．いのちの光

●序論
先日、御影の瀬古慎二先生と森下真理子先生の結婚式に参列しました。
司式は和泉神愛キリスト教会の平松慶次先生からとても短いおすすめが語られました。
冒頭、ゆっくりと「今から、聖書によるありがたいことばをお話しします」と。
…さて、「ありがたい」という意味を改めて調べてみました。
そこには、「神々しい、尊い、もったいない」とありました。
今私たちの身の回りには、さまざまな「ことば」があふれています。そんな中で本当の意味で、いわゆる「ありがたいことば」はめったにない。
世界では、恫喝や脅迫、敵意や憎しみ、偽りや欺瞞、だましごと、悲しみや苦しみ訴える言葉があふれています。一人の人が発する言葉が、聴く人を欺き、惑わし、そして騙す。そんな言葉が、争いや国家・民族間の争いにまで発展することさえあります。
言葉は、もともと、自分の気持ちを伝え、また相手の思いをくみ取り、お互いの信頼を築き上げ、時には回復する上で大切です。しかし今、「対話が大切」と言われながらも、それが上滑りになってしまうような欺瞞があちらこちらにある、そんな時代が私たちの生きる世界かもしれません。

今日お読みした、「ことば」と言われている方は、少し後のところを見ると、いわゆる神の子イエス・キリストそのお方であるとわかります。
:14 そして言は肉体となり、わたしたちの内に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。
ここから、この真実な「ことば」なるイエス・キリストに目を向けて行きましょう。

●本論
Ⅰ．この方の起源は、はじめから
この福音書の、もっと印象的な出だしが心に残ります。
1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
1:2 この言は初めに神と共にあった。

「はじめに」という表現では、創世記の1章と対比される表現です。
　　創世記1:1 はじめに神は天と地とを創造された。
ここでわかるのは、この「言（ことば）」であるイエス・キリストは、天地万物が作られる以前から存在しておられたということです。
　もっと理解を深めるならば、「時間」というものが造られる永遠の以前からこの方はおられた。　そして、この方は「神と共にあり、また神ご自身であった」ことが、ここで証言されています。
　　いわゆるこのような霊的な表現だからこそ、わたしたちはどこかで理屈ではなく霊の部分で「わかる」者とされているのです。
当時、イエス・キリストについて言えば、ローマ帝国時代の人々にとっては、クリスチャンが信じている存在として知られていました。
　あくまでも歴史の中での出来事、その生まれはベツレヘムでその終わりは、30代でエルサレムという風に、地理的、歴史的に枠をつけてキリストを理解していました。
　それが普通の理解の仕方であり、それがわかりやすい。
しかしヨハネは、はっきりと「すべての始まる以前から存在する方」としてキリストを描き出したのです。
そしてこの方こそ「神」であると。　ここにはっきりと違いを語りだします。
　さて、私たちの理解もここで問われます。イエス・キリストを天地万物の始まる以前からおられる神ご自身として、その違いを受け止めているか？…と。

Ⅱ．この方はすべての造り主
　　1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。
これは、キリストが神であること、そしてこの方が世界を創造する力を持っていることを表しています。この創造の力は、私たちが知ることができるすべてのもの、人々、動物、植物、全宇宙、そして私たち自身を含んでいます。
　またそれは、いわゆる物体をただ形づくるだけはなく、生き物ならば、それをそれぞれの環境で生きるものとしました。
　また宇宙に法則や秩序までも造られ、長くそそれを保たれるように造られました。
　神さまは、その造られたあらゆるもののゆえにもっと知られ、賛美されるべきです。
　　世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物（つくられたもの）に現れており、これを通して神を知ることができます。（ローマ1:20）
　何一つ、キリストと無関係などではありえない。いやむしろキリストなしでは存在しえないのが、今わたしたちが見、そして生きているこの世界のすべてなのです。
そういう意味で、今日示されている「ことば」はわたしたちが口にする言葉と大きく一線を画します。「ありがたい？」いや「神々しい？」いや、それ以上のものなのです。

「言葉が何を生み出すか」が重要です。
　　人の言葉も、何かを生み出します。信頼や、安心、慰めを生み出すこともあれば、悩み、悲しみ、偽りやだましごとも生み出す。だからそれが争いとなります。

イエスさまも言われました。

「というのは、悪い思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹（そし）りは、心の中から出てくるのであって、これらのものが人を汚すのである。」（マタイ15:19-20）

しかし今日、わたしたちが注目している「ことば」は、そんなものではありません。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

キリストこそ、わたしたちが本当に耳を傾けるべきお方、聴くべきお方であるということ、いのちにかかわる大切な「ことば」だと、ここで知るのです。

Ⅲ．この方はいのちの光

今年の教会のテーマを「キリストにつながっていなさい」です。

ヨハネ15:4-5 わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。…わたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。

キリストの思いは、くださろうとしている物を、わたしたちに受け取ってほしいと願っています。それは豊かな実と言われるいのちに満ちた祝福です。

先ほども申し上げました。「言葉が何を生み出すか」が重要です。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

聖書は、神さまがご自身のひとり子イエス・キリストをくださることで、わたしたちを罪から救い滅びから救い出し、永遠の命を与えるためであると述べています。

神はそのひとり子（イエス・キリスト）を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）

神がこれほどまでに、わたしたちの命に、人のいのちに、滅びからの救いに関心をお持ちであるにもかかわらず、目を転じてわたしたちの世界を見ると、まったく逆の方向に人は目を向けているかのように思える時代を、わたしたちは生きています。

人のいのちを奪ってでも、相手を滅ぼしてでも、奪ってでも…、という自分の心の闇に従って行動を起こす。

その闇を好物にする存在が、わたしたちの中にある罪の性質です。

悪を行っている者はみな光を憎む。そしてそのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。（ヨハネ3:20）

闇は人の心の近くに、そして中に広がろうとします。そんな闇にわたしたちはしばしば自分の無力さを覚えるかもしれません。

しかし、今ここで聖書は、わたしたちの知恵や力や想像をはるかに超えた天地万物をつくられた「ことば」を指し示し、このことばに人を生かす命があることを示し、さらには、その命こそ人の光であり、さらにこう語るのです。

1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

天地万物とその法則そのすべてを造られたイエス・キリストは、この地上に肉体を取って人となってこられました。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マルコ2:17・新共同訳）と。

そしてイエスさまは言われました。
「よくよくあなたがたに言っておく。（わたしを）信じる者には永遠のいのちがある。」（ヨハネ6:47）
何度も、申し上げます。「その言葉が何を生みだすか」が重要です。
神は、ここで全宇宙をつくりだすほどの絶大な力ある「ことば」、キリストを通して、わたしたちのために滅びからの救いと永遠の命をくださったのです。
まさに、信じる者を、「闇から光へ」と入れてくださる、まさに絶大な力あるわざをわたしたちの上に臨ませてくださったのです。
もし現代の、わたしたちの身近で、そして世界で起こっているできごとが、誰かの心の闇からか起こってきたものであるならば、わたしたちは、その闇に打ち勝つ光をこそ、求めて祈らなければなりません。

最後に）
闇はしばしば、わたしたちの身近にあり、心を探ります。だから私たちはキリストを頼りとし、光の中に生きることが大切です。
先の平松慶次先生は、「ありがたいお話」の中で、聖書が示す愛は、「闇の中に輝く愛」であると語り、夫婦はこれからお互いの心中にある「闇」を見ることになる…。
そんな中でイエス・キリストはわたしたちに闇の中に輝く愛をくださると。
この愛を心から受け取り、聖霊の助けをうけて愛する。その愛のみが家庭を教会を建て上げると。　そしてこう言われました。「よう祈りい…！」と。
あらためてわたしたちが見るべきは、そして頼るべきはキリストであり、このキリストにつながり続けてその愛に生きることだと覚えましょう。周囲に、また自分自身に、そしてあなたの目の前いる人に、どんなに闇が働いているように見えても、わたしたちがより頼むべきは、キリストなのです。
1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。
この証言のもとにわたしたちは、信仰によって生かされているのですから。